

日本の近代化と経済エリートの文化的位置

— 「実業家」をめぐる社会学的考察 —

永 谷 健

要旨：近代日本において殖産興業を先導した経済エリートは、多様な公職に就任するとともに特徴的なハイカルチャーを生み出すなど、政治的・文化的に独特な存在感を示した。彼らがエリート的な地位を占めた過程には、二つの差異化が重要な意味を持つ。「実業」の模範者として自己を正当化する過程、そして、エリート文化の指標となる象徴財を獲得する過程である。前者は、封建的な賤商意識からの離脱を志向するものである。明治期半ばには、勉学（とりわけ「虚学」）や学校教育とは異なり、また、非道德的な「虚業」とも異なる実地の民業が「実業」として正当化される。彼らはそうした思想的な趨勢に倣いながら、明治後期において新聞・雑誌で自らを道德的な「実業家」として語った。また、後者は、明治初年に上流社会で流行した能楽や茶事を自己の地位にふさわしい文化的アイテムとして彼らが積極的に取り入れ、趣味のネットワークを形成した過程である。二つの差異化の過程は、勉学・学校教育の貶価や伝統文化への傾倒という点で、プレモダンへの志向という特徴を共に持つ。次世代の実業家も反知性主義や伝統主義を表明することが多く、そのことは昭和初期という社会の変革期に至って、再び経済エリートの社会的な立ち位置を複雑なものとした可能性がある。

1. はじめに

日本の産業化、あるいは近代化にとって、戦前期の実業従事者が果たした役割は大きい。とくに農工商の各分野をまたぐ、いわゆる「実業」の領域を先導した経済エリートは、近代日本において独特の存在感を示した。とりわけ明治期に彼らは国策である殖産興業を牽引し、革新的な経済活動を行うなかで、日本が近代国家へと離陸していくプロセスに貢献した。彼らの事業活動については、経営史学で分厚い研究の蓄積があるのは周知のことだが、他方で彼らの活動範囲は、事業活動のみならず政治や文化の領域にも及ぶ。彼らは公益性のある役職や公職に準じる地位に就任したし、それと同時に独特なハイカルチャーを生み出した⁽¹⁾。明治期に限らず、彼らは戦前の日本社会において独特な存在感を示したのである。また、彼らの多くは近代日本の超富裕層（あるいは傑出した資本家層）を形成したのであり、政治的に有力であり、かつ、文化的な威信を纏う経済エリートとなったのである⁽²⁾。また、彼らはその後の歴史変化におけるキーパーソンでもあった。大正後期から昭和初期においては、彼らの富の独占が盛んに批判され、テロリズムのターゲットとなった。彼らが経済統制を受け容れたことは、戦時体制の進行を加速させた。近代日本の劇的な社会変化において、彼らは重要な位置を占めたのだと言える。

本稿では、こうした彼らによる近代日本のなかでの独特な位置取りに着目し、彼らが高い社会的地位と文化的威信を持つ経済エリートへとどのようなプロセスで登りつめたのかを検討したい。とりわけ、他の集団や階層のあいだでどのような差異化が図られたのかに注目したい。

彼らの封建的出自は多様であるが、職業的な継続性から見れば、維新後の生業は農工商に携わる「実業」である。そのため、封建身分からすれば下層に位置づけられる。しかし、四民平等後の近代国家の建設、そして、殖産興業という国策なかで、彼らの職業威信は急上昇したと言える。封建身分の序列や士農工商の別という基準からすれば、彼らの生業（「実業」）の職業威信が低かったのは確実であり、したがって新時代における彼らの成功は、しばしば「成り上がり」と見なされた。²「成り上がる」過程で、そして他集団や他階層との多様で複雑な差異化のなかで、彼らはエリートの的な位置を占めていった。それでは、そうした差異化はどのような局面において、どのようなプロセスで生じたのであろうか。

以下では、まず「実業」の職業威信の上昇プロセス、次に文化的威信の上昇プロセスについて順次検討していく。

2. 「実業」の職業威信

封建身分秩序の崩壊以降、「実業」の成功者は短期間で経済エリートの地位を占めていった。ただ、この過程は、封建期に由来する根強い賤商意識や反営利主義の思想と容易に折り合うものではなかった。殖産興業という国策の優等生であった彼らがエリートの地位を占めていく過程において、農工商の職業威信の向上は当時の大きな課題であったはずである。こうした課題の解決は、どのような道筋で行われたのであろうか。明治前半期の新聞・雑誌を一瞥すると、彼らの成功に金銭的なダークティさを見て取る記事が多いことに気づく⁽³⁾。ただ、成功者を一方的に揶揄し批判する記事が際立つ一方で、自己反省的な記事も多い点には注意すべきである。それらは、金銭に疎いプレモダンな庶民気質に共感しつつも、そうした気質の克服が必要であることを示唆する。一例を示そう。『国民之友』（明治23年9月）に掲載された「労作、節用、貯蓄」という論説は、成功者を「奸商」に見立てて批判的に語る。しかし、他方で庶民のプレモダンな気質には反省を促す。「将来を慮らざる者は、実に野蛮人」であり、「奸商」が「奇利」を貪るのは「一般人民学識なきが為め」である⁽⁴⁾。旧来の賤商意識に対する反省や新たな金銭観・民業観への転換を奨励するという趣旨である。ただ、新たな金銭観や民業観について具体的に語られるわけではない。「奸商」のように反道徳的ではなく民業に従事する者（「正業者」）の行動の規準とは何か。そして、民業における正統な成功とは、いかなるものか。これらの探索が進み始めた明治期半ばに、「実業家」という言葉が新聞・雑誌で盛んに用いられ始めた。「実業」には「虚業」の排除という道徳的な含みがあり、この言葉が出現したことは、民業者の道徳的規準に社会的な関心が集まり始めた時代を象徴している。

ここでは、「実業家」という用語の普及に一役買った中江兆民の議論を取り上げよう。中江の論考には、この時代の民業や金儲けに関する思想が反映している。とくに「虚業家」との関係について彼が語る場合は、民業の道徳的規準について述べられる。彼は主筆を務めた『東雲新聞』に掲載された記事、「虚業家」（明治21年10月5日版）において、奸智に長けた「御用商人」を「虚業家」と名づけている。記事は『四民の目ざまし』（明治25年刊）に所収された。そこでは、次のように述べられる。「余は又世の中に虚業家と謂ふ可き物体有ることを発見したり」。その「物体」とは、「経済海中の鰐鰯とも云ふ可くして常に他の小魚を喰ひ殺して己れの腹を肥やす奴なり」。さらに、「社会の暗黒なるに乘し他の実業家の明かに見ること能はさるに乘し狡々猾々的手段を施して一時の巨利を占むる奴なり」。そして、「他の実業家を喰ひ殺し

て自ら腹を肥やす」。「経済社会の鴟梟とも謂ふ可し」⁽⁵⁾。彼らは他の「実業家」の取り分を搾取して利益を独占する「奸商」だということであろう。

中江の語りの背景には、官業の払い下げが徐々に進み、いわゆる御用商人への批判が高揚したという状況がある。「虚業家」は「俗人の目には実業家中にても最上の実業家なり」と彼は言う。外面はエリートであるが、「何一つ実地に社会に益する者」ではない⁽⁶⁾。中江によれば、欧米諸国ではこうした「虚業家」「悪業家」は沢山いる。彼らは「無一物の身代」から「数十萬の身代」となった。その「道行の第一歩」は、「先づ當時當途の貴顕中にて稍や己れの性質に似て鰐鯨然たる人物を捉まへて事を為す」ことである⁽⁷⁾。すなわち、彼らの飛躍的な成功のきっかけは権力者への接近である。彼らは「官用公用の金を貰らい来り」、あるいは「借り来り」、それを「第一歩の資本として事を為したる者なり」。そして、「我邦にても或は一二斯くの如き鰐鯨商人出つること無しとも断せられす」⁽⁸⁾。中江は日本のエリート実業家を名指しで批判しているわけではないが、「御用商人」の描写は入念であり、官営事業の受け手である当時のエリートたちを念頭に置いているのは確実である。

「実業家」からの搾取による利益の独占、公益にかかわりのない私益追求、政治権力への接近による利益誘導。これらが、中江による「虚業家」のイメージである。したがって、中江が示唆する正統な民業家（「実業家」）が行うべき所作は、それを逆倒したものということになる。こうして中江は、「実業家」が「真面目に農工の業を為して物を作り」、「商の業を為して物を運」ぶことを望む⁽⁹⁾。彼は金銭に淡白な庶民と狡猾な「奸商」や御用商人を対置する単純な枠組みから一歩抜け出し、「虚業家」との差異により「実業家」を正統な民業者として特徴づけたのである。

中江がこの論考を書いたころから、「実業家」という言葉は正統な民業家を指す言葉としてしばしば新聞・雑誌に登場する。それとともに「実業」という言葉そのものも単独で使用されることが多くなり、福澤諭吉の『實業論』など、「実業」をタイトルに含む書籍や新聞記事は増えていった。書き手により「実業」の意味は様々であるが、「虚業」とは異なる正統な民業というニュアンスがそこにはしばしば込められている。

もう一点、「実業」の含意について触れておこう。それは民業に従事する者たちの矜持や彼らの社会的地位、あるいは職業威信の問題と深く関わる含意である。

「実業家」という言葉は「多くは学者文章家又は理論家に対して言ふことなり」と、中江は述べている⁽¹⁰⁾。当時、民業活性の妨げになるものと指摘されたのが、書物中心の学問や学問的知識の偏重であった。殖産・富国を実現するには、「虚文」や「虚学」を廃して職業の実際（すなわち「実業」）に当たる必要があるという主張である。「実業」には、実地の業（現業）よりも文化的な威信が高いであろう学問、および、それを学ぶ学校教育に対するアンチテーゼの含意があったことには注意すべきである。

一例を挙げよう。『民間小学演説集誌』（明治12年）は、巷間の啓蒙家たちの演説の類を著者名や口述者名の記載なく青木輔清が編纂した論説集である。ある論説では、「士族の商法」について述べられ、「学問」と「実業」は本質的に異なることが力説される。曰く、「士族は大概。是迄の町人百姓より学問も出来。是迄百姓町人を支配し。随分商法向きの事も…（中略）…布令した」。しかし、「自分が実地に商業にかゝつて見ると。一ツも當ることなく。皆失策ばかりで。損をせぬ人は。まずない」というあり様である。これは、「学問は出来たりとて。商法の真理を知らず。世の形勢事情を察せぬ譯であろう」⁽¹¹⁾。つまり、士族は「学問」ができる

が、「実地の商業」や「商法の真理」を知らないので、成功しないというのである。したがって、まずは、「彼我の事情を洞察し。実地其業を修行するこそ。緊要」である。「実地其業」は、「学問」では知り得ないもの、「修行」して身につけるものなのである。したがって、失策は士族自身の問題であるというよりも、実地の経験や応用を軽視する「学問」偏重（つまり虚学）にある。「太郎兵衛どんの息子は。経済学を勉強するそうだから。今に金満家になるであろう」などと思い、父兄も当てにして待つ。また、「何某先生は理財学に精しく。多く経済書を著すから。其家に定めし節儉にして。冗費濫用なく。多く蓄財あるべし」などと思うのだが、これらの推測は「大ひに當が外れ」る。「学問と実業とは。密付せざるもの」、つまり、「学問」がそのまま商売や事業の実務につながるわけではないからである⁽¹²⁾。たしかに、ここでの「実業」は「実地の業」、つまり生業や事業の実際（実務）くらの意味にすぎない。しかし、武士的な教養を連想させるような「虚文」や「虚学」の対抗概念としての意味を含んでいる。それは、親が子に「学問」に偏った教育を施すことに注文をつけている点からも明らかである。「只学問さへ致させたら。何事も。何業も夫で出来上るものと一圖に思ひ込み。跡で大當外れして」しまうことがあり、そのような「心得違のない為に。学問と実地の業との。同一でない譯」を知っておく必要があると説いている⁽¹³⁾。

また、学校教育のなかでも、実際に「実業」を「虚文」「虚学」の対抗的な営みとして捉える動きがあった。明治20年1月の官報では、石川県の小学校で「実業科」が設置されたことが報告されている。設置の理由は、県下の小学校教育では「従来虚文ニ流ル、弊」があったためであるという。そこで、「子弟ヲシテ実業ヲ修練セシメンカタメ」に同科を設置し、養蚕や農耕の実習を導入したという。官報はその顛末を次のように記している。

「元来小学教育ハ虚文ニ流レ生徒ノ上級ニ進ミタル者若クハ卒業シタル者ハ早已ニ父兄ノ家業ヲ厭忌スル者往々ニシテ之アリ父兄亦学校ヲ目シテ有害無益ノモノトシ一時ハ兒童ヲシテ就学セシメサルニ至リシ……」⁽¹⁴⁾

つまり、「虚文」に影響された若者は家業から離れることが多いので、父兄は家業にとって有害な学校に子弟を学ばせない。しかし、同科を導入したあとは、父兄が「実業地」（農地）の寄付を申し出るなど協力的であり、そのうえ就学児童が増えるという効果が出たというのである。

いずれの例も、「実業」が示すものは実地・実務の業である。そして、この言葉には、明らかに勉学の世界そのものや明治前期の学問熱に対する対抗の意味が含まれている。書物中心の「学問」による民業への理解不足、そして、学校教育による実地・実務の等閑視などは、「虚文」ないし「虚学」が陥る失策であり、それに対して民業や現業は、実地・実務を実質的に支えている点で「実」の「業」であるというわけである。先に触れたように、中江は頻繁に使われ始めた「実業家」という言葉の多くは、「学者文章家又は理論家に対して言ふことなり」と述べている。「実業家」に先行して使用されてきた「実業」という言葉には、もともと学問や学校教育の世界に対する対抗という含意があったということである。明治5年の学制や明治12年以降の数度にわたる教育令では、小学校や中学校や大学校などの学校種が定められるとともに就学義務の概念が導入された。さらに、明治19年の小学校令では義務教育期間がはじめて明示されるなど、当時は、教育制度が徐々に整備されていくなかで学問熱が高まっていった時

代である。そうした時代にあつて、民業の推進者や啓蒙家はその職業としての価値や重要性を主張する必要があつた。そうした背景をいわば含み込んで、「実業」の概念が成立した。

再び「実業家」論に戻ろう。以上のように考えると、民業（現業）従事者の職業者としての矜持やアイデンティティは、ひとつには「有害無益」である「虚文」や「虚学」を排して「実」を取る点に求められる。それに対して中江が「実業」論で述べたのは、「実業」従事者を、さらに正統な「実業家」（正業者）と「虚業家」とに区別できるという点である。民業従事者の新たな矜持は、利益を独占する利己的な「御用商人」（「鰐鯨商人」）、すなわち「虚業家」とは一線を画して、正統な「実業」を行うことである。野心的な商人に注目が集まり、「奸商」「御用商人」批判の言説が多く生み出された時代に、正統なる「実業家」とは何かの規準を探索する思想的な営みが始まった。封建期に由来する賤商意識は、このように学問や学校教育との差異化や正統な民業概念の生成という過程をへながら、金銭的な成功者を社会的に承認する時代と折り合っていたと考えられよう。

3. 文化的威信の創出

前節では、経済エリートによる様々な事業が封建的な序列から見れば下位に位置するという矛盾が、明治期をつうじて解消へと向かう思想的な動向について述べた。この節では少し視点を変えて、彼らが新たな社会秩序のなかで上層の位置を積極的に占めようとする動きについて述べたい。先に触れたとおり、彼らは事業の成功によって殖産興業という国策の優秀なプレイヤーであることを証明した。そして、金銭的な利益には直接つながらない多様な公的役職を拝命した。彼らは個別に「成り上がって」、いった。ただし、彼らは個別の「成り上がり」とは別に、自発的にエリート集団を構成していった。集団形成の道を進んだのであるが、集団の明瞭な指標は独自の文化を意識的に形成した点に観察される。彼らは非成功者との文化的な差異化に対して意識が高かった。彼らは文化的な象徴財、あるいは威信財を積極的に獲得しようとしたのである。

彼らが明治前半期に求めた文化的な象徴財は、接待文化にかかわるものであったと言ってもよいであろう。拙論ですでに何度か論じたように、明治12年に外賓が来日した際、明治政府は彼らに外賓接待の会場提供や企画を依頼し、その結果、彼らは国内外の賓客との接遇文化へと誘導された⁽¹⁵⁾。なかでも香港総督、ジョン・ポープ・ヘネシーに対する饗応（明治12年6月）は、元アメリカ合衆国大統領、ユリシーズ・シンプソン・グラントの来日の準備も兼ねた盛大な企画であつた。渋沢栄一、益田孝、岩崎弥太郎、三野村利助などの在京実業家らによる懇親の宴会、東京商法会議所への訪問、新富座での観劇、三井家の深川別業への招待などである⁽¹⁶⁾。三井家が会場提供で幾度も外賓接待に協力していることには留意すべきであろう。来賓を歓待する場所の確保が重要課題のひとつだったのである。その後、グラントの来日があつた。実業家たちは工部大学での夜会、新富座での観劇の企画に携わり、それらに同席した。また、府会議員や商法会議所の他の議員とともに上野公園でグラントを天皇に接見させる臨幸行事の開催を企画し、実施した（同年7月）。企画は、接待委員長である渋沢、あるいは益田や福地源一郎たちが中心となって練られた。

グラント接待の全体像については、渋沢の娘、穂積歌子の回想に詳しい。それによれば、工部大学での夜会の出席者は、来賓の各国公使、日本の大官たち、それらの夫人方、在留欧米人

ら、そして、主催の接待委員とその家族、および実業家であったという。接待委員の「夫人令嬢」も出席することになり、「實業家の人々の家庭に、現代の詞で申せば一つのセンセーションを捲き起した」。夜会であるために「婦人の服装は成べく派手にといふ注意」を受けて、穂積たちは大変困ったという。「どなたも未知の戦場へ初陣といふ様な緊張があった様です」と語っている。益田孝、大倉喜八郎の妻も出席したという。舞踏の時間もあったが、「私共婦人たちは壁際に並んで驚異の目をみはって眺めて居た」という。また、新富座での観劇では、「宮様方、大官達、及接待委員の幹部の人々」が同席した⁽¹⁷⁾。

また、『東京日日新聞』によると、上野公園での臨幸の企画では、東京府会において「御臨幸委員会」が設置された。そして、その委員として渋沢、益田、福地をはじめ、安田善次郎、大倉喜八郎、岩崎弥太郎、三井八郎右衛門、朝吹英二などの実業家が選出された⁽¹⁸⁾。行事自体は様々な余興ののち、夕刻に終了した。彼らは外賓接待という国家的事業の運営に携わったばかりでなく、種々のセレモニーでは明治政府の大官と臨席し、さらには降臨行事の中心にいた。いわばにわか作りの名士である彼らが、自らの社会的地位の途方もない上昇を強く体験したのである。

上流社会の交際のあり方についても、彼らは様々に模索していたと考えられる。彼らの少なからぬ者が能楽に傾斜していった。安田の例が明快である。『安田善次郎全傳』によると、グラントたちが来日した翌年の6月16日に、安田は宝生流の謡曲の稽古を始めている⁽¹⁹⁾。能楽への傾斜は安田ばかりではなく、三井総領家の三井八郎次郎や同じ三井の経営者・益田孝も、この時期に謡曲を習い始めている。梅若實の日記やその息子・万三郎の回想からは、彼らが梅若實のもとで頻繁に稽古していたことがわかる。それらによれば、益田は明治13年4月13日に入門していること、三井八郎次郎は同年7月3日に稽古を始めていることがわかる。安田が稽古を始めたのとほとんど同じ時期と見てよい⁽²⁰⁾。

彼らが能楽へと一斉に傾いていったのは、岩倉具視による能楽保護やグラント来日の影響が大きいであろう。明治初年、梅若たち能楽師は一部の華族と交流を持っており、中川久成、毛利元徳などのように、華族のなかには梅若に入門した者もいる⁽²¹⁾。岩倉具視も能楽への関心は高く、明治9年4月には自邸で天覧能を催している。他の華族の邸でも天覧能が幾度も行われた⁽²²⁾。その後、岩倉の能楽保護はグラント来日で一層積極的になった。『岩倉公実記』によると、岩倉具視が延遼館に滞在中のグラントを訪ねた際、グラントは「貴国ニハ固有ノ音楽アリヤ」と尋ねたという。そこで岩倉は、朝廷の祭式礼典に神楽や催馬楽や舞楽があるが、「今日ノ人情」には適さないこと、むしろ中世以降の作である能楽は、今日でこそ衰退しているが「高尚優美ノ技芸」であると答えた。するとグラントは「一見センコトヲ乞フ」と述べて鑑賞を望んだので、7月8日に彼を岩倉邸に招き、能楽師に二曲を実演させたという。以降、岩倉はヨーロッパのオペラのように能楽を保護しようと、華族の有志と相談したのだという。能楽に対する岩倉の関心は高く、その後、8月18日、19日の両日、自邸に皇太后宮と皇后宮を招き、やはり能楽師に能楽を実演させている⁽²³⁾。三井や益田、安田たちが能楽に近づいていったのは、こうした出来事のすぐ後である。

三井、益田、安田は、明治初年において一部の華族が行っていたように能楽の稽古を始めた。それはやはり、グラントらの外賓の来日が引き金になったと考えるのが自然であろう。彼らは外賓の接待行事を間近で見ることにより、能楽が皇室や華族のあいだの社交・接待の中心を占める文化的な媒体であることを確認したに違いない。彼らにとって能楽は、華族を中心とする

「上流社会」へと接近し、「上流社会」のなかで社交・接待をスムーズに行うための貴重な文化的資源であったと言える。

彼らが関係した資源は他にもある。茶事文化がこの頃から流行し始めた。芸能史の諸研究が語るように、維新以降、身分制度の解体で家元が有力なパトロンを失うことにより、茶事は衰退していった⁽²⁴⁾。しかし、明治10年代になると、おもに華族のなかで茶事は復活の兆しを見せ始めた。資料的な制約により、明治前半期の茶事については明らかでないことが多い。そのなかで、明治の茶人として知られる旧公卿・東久世通禧の日記には茶事に関する記載が多く、それを見れば明治10年以降の状況の輪郭をつかむことができる。日記には、明治10年8月21日に行われた第一回内国勸業博覧会の開会式における上野への天皇・皇后の行幸が記載されている。そこでは式典や美術館巡覧などの行事が一段落したあとに休憩時間となり、脇坂安斐（旧龍野藩主）が天皇への献茶を行った記載もある。一連の行事のひとつに茶事が組み込まれたのである。また、廣田吉崇は、天皇への献茶に伝統諸芸の天覧に携わった岩倉の関与があったことを示唆する⁽²⁵⁾。誰の発案によるものかは不明であるが、茶事が皇室および華族のハイソな嗜みとして注目され始めたことは確かであろう。

東久世の日記では、明治12年3月ごろから茶事関連の記載が増え始める。記載の多くは、旧公卿の西四辻公業や脇坂安斐などの華族を含む知人たちとの煎茶会・抹茶会についてである。また、南部信民（旧七戸藩主）や東久世自身が同年に茶室を落成したことも記されている。

彼の日記を見れば、明治12年にはすでに、一部の華族のなかで茶事が流行していたことがわかる。この流行に実業家たちは敏感であった。翌13年以降に茶事に傾倒する者が現れ始める。なかでも安田善次郎は敏感であった。『安田善次郎伝』では、明治6年か7年ごろには、「已にぼつ、其の道を心懸け」と述べられているが、他の資料にもそれ以上の記載はなく、詳細はわからない。ただ、安田は彼自身が主催した茶会の詳細な記録（『松翁茶会記』）を残しており、その起筆は明治13年1月14日である。「一月十四日 横網別邸に於て始めて客を招き茶會を催す」とあり、この頃から彼が本格的に茶事に携わり始めたとしてよいのではないかと⁽²⁶⁾。安田による茶事への傾倒は著しく、華族や他の事業家が催す茶会へと頻繁に出かけている。また、別邸での茶会も頻度を増していった。初期の茶会記に記されている客人は彼の知人が中心であり、華族はほとんど招かれていないが、明治18年以降は松浦詮、東久世通禧、南部信民など、華族を招くことが多い⁽²⁷⁾。知人との小規模な茶事が、先行する華族たちの茶事ネットワークへと合流したのである。

他方、三井家の一族は江戸時代から表千家の門弟になるなど茶道の嗜みがあつたが、明治になってからは、安田とほぼ同じころに本格的に携わりはじめたとみられる。別稿で述べたことがあるため詳細は省くが、明治14年6月に三井高福・高朗・高棟が京都から上京したおり、表千家家元の碌々斎を伴っていたという記録や明治15年、16年に高棟の兄・八郎次郎らが東京で茶会を主催していた記録がある。こうした記録から推せば、明治10年代前半に、三井一族は表千家との関係を深めていったと考えられる⁽²⁸⁾。さらに関西でも、ほぼ同時期に実業家のなかで茶事が流行し始めたと推測される。『東京日日新聞』（明治14年2月7日付）では、明治14年1月に藤田伝三郎が邸で開いた茶会に大阪の銀行家・平瀬亀之助らを招いたことを伝えている。藤田や平瀬は茶室に配置する茶道具や書画のコレクターとして知られる。この茶会は、後の実業家茶事のなかでも、コレクションの披露に重点を置く豪華な茶事（道具茶）を先取りするものであろう。

また、少し時代は進んで、明治20年2月1日に京都博覧会の一部として開催された新古美術会に天皇の行幸があった際には、三井高朗と三井高棟が天皇に献茶を行っている⁽²⁹⁾。この献茶は、彼らが皇室や華族との距離を確実に縮めていたことを示している。茶事はその後、実業家や一部の華族たちを含む趣味のネットワークを形成し、近代日本の代表的なハイカルチャーになっていった。そして、明治後期に至って、茶事に通じた実業家たちは数寄者茶道の中心を占めるようになる。益田孝もそうだが、茶事の歴史や茶器等の骨董に通じた実業家が多く現れた。趣味に対するこうした彼らの知識欲は、他階層を想定した文化的な差異化の現れとして解釈できるであろう。やや唐突ながら、ピエール・ブルデューによる近現代フランスの「成り上がり」についての言及を少し参照しよう。

「彼らプチブルや成り上がりたちは、ちょうど映画愛好家たちが自分の見たことのない映画についても知っておかなければならないことはすべて知っているのと同じようにして、経験を犠牲にしても知識を特権化し、作品そのものを熟視することをおろそかにしても作品について語ることを優先させ、感覚 *aisthesis* を犠牲にしても訓練 *askesis* を重んじるようにしむけてゆく禁欲主義的な墮落の諸形態にいつも直面しているのである。」⁽³⁰⁾

ブルデューが言う「知識を特権化」する姿勢は、実業家による茶事への傾倒にも顕著である。それが「禁欲主義的な墮落」かどうかは保留するが、実業のトップランナーでありつつも、同時に趣味の世界に没頭する彼らに、文化的な差異化へと進んでエリート文化を築いていく意思を読み取ることは可能であろう。

もちろん、彼らのなかには能楽や茶事にあまり傾倒しない者もいた。たとえば渋沢栄一は、安田による初期の茶会に招かれるなど、茶会に参加していないわけではないが、積極的ではない。しかし、明治32年には飛鳥山別邸に無心庵という茶室を建てている。受け身の嗜みであるが、無心庵を外国人客の接待や政治家との歓談など、様々な社交活動に利用している。また、大倉喜八郎の場合は、茶事への関心は高くなかった。齋藤康彦によれば、大倉は明治14年から16年にかけて何度か客人として茶会に出席している⁽³¹⁾。しかし、それ以降は積極的ではない。むしろ彼は、伝統文化に囚われない娯楽的な宴会や園遊会へと傾いていったようである。会場はおもに向島別邸や赤坂本邸であり、実業家、政治家、華族を賓客としておもに手品・曲芸・義太夫等の余興でもてなす会である。また、明治39年10月に開いた園遊会では、出し物に歌舞伎役者の演技を組み込んだと言われる⁽³²⁾。さらに、感涙会という宴会を毎年催した。ただ、益田孝が主催した著名な大師会のようにハイカルチャーを志向するというよりも、威信ある文化的アイテムには囚われない、いわば階級開放的な会であった。模擬店を出したり、招待客による一芸披露の場を設けたりと、娯楽的な趣向が強い会であったようである。小説家・劇作家の田村西男は、感涙会について次のように回顧している。

「最初感涙会に招待を受けた時は、きつと階級閥があるから、吾々が出席しても、恐らく不快な事が多からうといふ覚悟で出席した。すると全然それが裏切られた。それは会場内の席であつた。雑然として減茶苦茶だ。(…中略…) 座りたい所へ勝手に座るのだ。つまり階級打破だつた。」⁽³³⁾

こうした階級開放・脱差異化の志向は、三菱にも見える。黒岩比佐子は、岩崎弥之助が岩崎久弥と催した明治 38 年の大園遊会に注目している。黒岩によると、日露戦争で多数の兵士が出征したため、彼らの帰還は二か月以上におよび、その結果、同年 10 月から翌年 1 月ごろまで「陸海軍の兵士たちの凱旋パレードや歓迎会が目白押しだった」という。

「岩崎弥之助と久弥が合同で開いた大園遊会だった。十月二十九日と十一月二日の二度に分けて、岩崎別邸（六義園）に、なんと一万三千名以上の将兵を招待したのである。十月二十九日の新聞紙面には、岩崎弥之助と久弥の連名で「在京連合艦隊下士以下各位に謹告」という広告が掲載されている。岩崎家の園遊会は、とくに下士官以下の水兵を中心にするという趣旨で開かれたため、新聞各紙はこれを岩崎家の快挙として大きく報じた。」⁽³⁴⁾

園遊会では御馳走の大盤振る舞いがあり、「国のために戦った無名の下士卒たちを主役にしたことが、大衆には受けた」と黒岩は言う。兵士とともに国益のためにある実業家像を岩崎は印象づけたという解釈である。ただ、富豪となった岩崎の財囊に大衆が唸ったという含みもある。実業家たちが主催する社交の場は、文化的な差異化への志向とともに富の誇示や脱階級志向などの多様な意味合いを含んでいたのだと言えよう。

4. 言論における差異化過程

2 節では、根強い賤商意識のなかで、「実業」が勉学や学校教育との差異化、あるいは「虚業」との差異化を通じて正統な生業として認知されていく過程を検討した。続く節では、実業家が自らエリートの証となる象徴財を獲得していく文化的な差異化の営みを指摘した。この節では、彼ら自身がメディアのなかで自分の経歴を実業の模範として語り始めたことを指摘したい。彼らはそれを通じて、自らをエリートとして定義したのである。とくにここでは、著名な実業家が啓蒙書のなかで経歴に関する語りを頻繁に行ったことに注目したい。経歴を語るなかで、彼らは自分の生業をエリート的な所作として提示したのである。

今では事業家や起業家が著した啓蒙書は一つの書籍ジャンルを形成しているが、近代日本におけるその始まりは、成功ブームが生じた明治 30 年代後半であろう。管見では、雨宮敬次郎、そして、渋沢栄一の成功読本はその先駆けである。雨宮については、単著（口述書）の出版以前に、その序章とも考えられる書籍がある。佐藤尚友が編集した『学生の前途』である。これは各界の成功者が就職難に直面する学生に送ったアドバイスを佐藤が編集したものである。現役実業家によるものとして唯一紹介されているのが、雨宮のアドバイスである。そのなかで彼は、地方のとある学校へ赴いたときのエピソードを語っている。「月給取」になりたい者に拳手をさせると、クラスの生徒の多くが手を挙げたという。彼は、「学問をして月給に有り附かうなど、云ふ考は、頗る卑屈の考でないか」という感想を持った。「卑屈」である理由は、せっかく学問をしてきたのに、使用される立場に進んで立とうとするからである。「事を為さんとせば、人を使ふと云ふ考を持たねばならぬ」。つまり、事業において肝要なのは、人をいかに使うかである。昨今の学生の姿勢は、これとは正反対だというわけである。自分に学問が足りないならば、報酬を出すことにより、「立派に学問をした人は幾等でも使へる」。自ら事業を行うには、必ずしも学問がなくてもかまわないのである。そして、「人に使はるゝ為めに学問す

ると云ふは独立自尊の精神の無いものである」と断言する。事業を行うために学問をするのはよいが、人に使用されるために学問をするというのは、「独立自尊の精神」が欠落しているというわけである⁽³⁵⁾。

雨宮の言葉は若者たちに対するメッセージである。現役実業家が自分の事業の現況を書籍で公表するケースはあったが、書籍でこのように教育的に語るとは、当時はまだ稀なことであった。たしかに『実業之日本』のような啓蒙雑誌では実業家による教育的言説は増え始めたが、書籍に及んだわけではなかった。雨宮は、おそらく書籍における若者への教育言説の先駆的な語り手である。翌年、彼は自叙伝『過去六十年事蹟』を刊行した。これは自分の成功経歴と苦心譚をまとめた自伝的な成功読本である。「序言」には、次のようにある。

「元来私の過去は人も知る如く全く奮闘の人で、奮闘の目的は徹頭徹尾社会及国家の利益を増進するのにあった。（…中略…）事に任じては赤誠と勤勉との外に何者もない」⁽³⁶⁾

この言葉どおり、全編にわたり彼自身の成功体験が「奮闘」、「社会及国家の利益」、「勤勉」と関係づけながら語られる。また、次の一節もある。

「私は学問がない。故に事を処理するは一に実験の力に據て決した。（…中略…）要するに私の過去六十年事蹟は実験の歴史である」⁽³⁷⁾

「私は学問がない」には、学校卒業者の就職難が言われる時代における「独立自営」の実践者の自負や矜持が示される。さらに、この自叙伝を読んだ実業之日本社の記者、井上泰岳の勧めにより、彼は同書を大幅に増補し、編集しなおした自伝的成功書、『奮闘吐血録』を実業之日本社から刊行した。「私は今でも血を吐いて居る。六十年来私の苦戦奮闘の如何に劇しかったかといふことは、この一事で察して貰ひたい」⁽³⁸⁾。この冒頭の一節は、先の自叙伝にはない。一般読者を意識して脚色されたことがわかる。

渋沢も若年層への教育的言説の先駆者である。彼には、雑誌『成功』を主宰する村上俊蔵の依頼による『実業訓』（明治43年）という口述の成功書がある。『成功』は明治30年代後半の成功ブームを支えた雑誌であり、渋沢は同誌にかつて寄稿したこともある。同書は村上との縁によって刊行されたとみられる。よく知られているように、渋沢は論語の思想を生かした一般的な处世道德や実業倫理の構築を目指していた。同書も実業で身を立てる处世術や成功法を説いた成功書である。そして雨宮と同じく、若者の就職難という当時の社会問題の原因は会社への就職を希望する若者側にあると説く。「天下の学生相競るて望みを一方面に属するに至った結果」、「供給過剰」が生じ、そのため「今日学校卒業者間に失意者の溢れつゝある」。つまり、学生の俸給生活志向の拡大が就職難という状況を導いたという解釈である。次のようにも言う。

「今や国家は自立自営の人士を要求すること急である、卒業者たる者は宜しく望みを一局部に属せずして其学び得た所のものを以て自主独立の計をなし、以て君父の恩に酬ふる處がなければならんと思ふ」。⁽³⁹⁾

学問を修めたからといって会社に雇われることのみを望むのではなく、「自主独立の計」を立てて、様々な進路の可能性を自ら探求すべきであるという。渋沢は若者の俸給生活志向という同時代の状況を批判的に語り、渋沢自身による「自立自営」の経歴を浮かび上がらせる。渋沢がとくに強調しているのが、国益や他者の利益を導くような営利主義に偏らない「自営」である。「真正の富といふのは即ち我も富み人も富み国家も其の為に進歩拡張して行くといふものであって始めて真の富と言ひ得るのである」と渋沢は語る。実業で身を立てる場合、「これが人として世に処するの要訣」であるとさえ言う。また、これらのアドバイスを総括して、「渋沢は斯く目的をたてたといふ事を参考に示したまゝである」と述べる⁽⁴⁰⁾。人生や実業の処方箋を若者に伝えるなかで、自己の「独立自営」による経歴を国益主義や利他主義を目的とするものとして解釈し直している。渋沢の語りは、雨宮のものほど自己の経歴を強調するような独白調ではないが、自己の事績を実業家の模範として提示している点では同じ語りの形式を持つ。

『奮闘吐血録』が刊行された翌月、雨宮は療養の末に亡くなってしまう。雨宮亡きあと、渋沢、森村市左衛門、安田善次郎、大倉喜八郎らが実業家による啓蒙書の中心的な語り手となった。渋沢は豪農の出身で幼少期から四書五経などを学んだ経験があり、さらに大倉も四書五経を子ども時代に学んだとされるが、彼らとて、幼少期や青年期に体系的な教育を受けたわけではない。森村や安田を含め、彼らは、封建期に幼少期・青年期を過ごした非学歴系成功者の典型であった。彼らは学問や学校教育との差異化、そして「虚業」との差異化という既成の方向性に倣いつつ、自身を実業分野のエリートとして自己呈示した。その結果、明治末から大正前半期にかけて、彼らの語りは実業家の啓蒙書という書籍ジャンルを形成し、多くの読者を獲得することになるのである⁽⁴¹⁾。

5. おわりに

本稿では、近代日本における実業の成功者がエリートの位置を占めていくなかで観察される差異化の過程について検討した。彼らは殖産興業という国策の優等生であった。しかし、そうした状況と封建期に由来する賤商意識のあいだの齟齬は、彼らの社会的な位置取りを不安定なものとした。そうした不安定さゆえに、多様な差異化の戦略が彼ら自身によって講じられたと考えるのが自然であろう。したがって、彼らがいわば作動的に、また急ごしらえで生み出したエリートとしてのアイデンティティは、それらの差異化に依存していたとも言える。すなわちそれは、学問や学校世界に対する意図的な貶価、そして、既成の正統文化（とりわけ封建期に由来する伝統文化）への接近によって支えられていたであろう。前者は「虚文」や「虚学」を排する思想の延長線上にあるが、明治期においては近代教育制度への懐疑がその内容となる。雨宮や渋沢、そしてその後の実業家たちがしばしば反学歴主義や高等教育不要論を唱えるのは、その現れである。また、後者にとっては、明治の前半期においてエリート文化を彼らなりに探索するなかで伝統文化をその核として採用したということであろう。そして、これらの二つの差異化はプレモダンへの志向という特徴を共有している。彼らは近代日本の産業化のトップランナーであったが、反知性主義や伝統主義を持ち合わせる集団でもあった。この点は、日本の経済エリートのその後の社会的な位置取りに少なからず影響したであろう。本稿で詳細を論じる余裕はないが、彼らの次の世代の実業家も反知性主義や伝統主義の主張を行う者が多い。新世代は彼らが生み出したエリート的な位置を継承したが、そのことが昭和初期という社

会的な変革期に再び経済エリートの社会的な立ち位置を複雑なものとしていった可能性がある。この点については別稿を期したい。

註

- (1) 彼らの公職就任については、次を参照されたい。拙稿「近代日本の実業エリートと社会的・文化的アイデンティティ」、城達也・宋安鍾編『アイデンティティと共同性の再構築』（世界思想社、2005）第4章。
- (2) 彼らが超富裕層を形成した点については、次を参照されたい。永谷健『富豪の時代』（新曜社、2007）第1章、第2章。
- (3) これについては、前掲『富豪の時代』第3章で詳述したので参照されたい。
- (4) 「労作、節用、貯蓄」『国民之友』第94号（明治23年9月）。
- (5) 中江兆民『四民の目ざまし』（博文堂等、明治25年5月）89-90頁。
- (6) 前掲書、90頁。
- (7) 前掲書、93頁。
- (8) 前掲書、95頁。
- (9) 前掲書、前掲頁。
- (10) 前掲書、76頁。
- (11) 青木輔清編輯兼出版『民間小学演説集誌』第五号（明治12年）4頁。
- (12) 前掲書、5-6頁。
- (13) 前掲書9頁。
- (14) 『官報』1056号（内閣官報局、明治20年1月11日）4頁。
- (15) 前掲『富豪の時代』第5章を参照されたい。
- (16) 井上馨侯傳記編纂会編『世外井上公傳 第三卷』（原書房、1968年）119-120頁、参照。
- (17) 「グラント将軍歓迎の思ひ出」『竜門雑誌』第509号（1931年2月）36-39頁。
- (18) 『東京日日新聞』2287号（明治12年）。また、中嶋哲也「術から文化へ：元米国大統領グラントの演武鑑賞と柔術」『鹿児島大学教育学部研究紀要：人文・社会科学編』66（2015年）も参照した。
- (19) 『安田善次郎全傳』（私家版）第二卷（伝記編纂所、昭和2年）264頁。
- (20) 梅若実日記刊行会編『梅若実日記 第三卷』（八木書店、2002年）324頁、梅若万三郎「謡が一番お茶は二番」鈴木伸樹編『大茶人益田鈍翁』（學藝書院、昭和14年）137-8頁。
- (21) 「書誌・解題」『梅若実日記 第七卷』（八木書店、2003年）7頁。
- (22) 藝能史研究会編『日本芸能史 七』（法政大学出版局、1990年）、参照。
- (23) 多田好問編『岩倉公實記 下巻』（原書房、1968年）623-627頁。
- (24) 前掲『日本芸能史 七』、参照。
- (25) 霞会館華族資料調査委員会編纂『東久世通禧日記 下』（霞会館、1993年）、および、廣田吉崇「明治前期の「貴紳の茶の湯」：『幟仁親王日記』および『東久世通禧日記』にみる喫茶文化の状況」『日本研究』45（国際日本文化研究センター、2012年）を参照。
- (26) 安田善次郎『松翁茶会記 巻之上』（安田善次郎、昭和2年）1頁。
- (27) 『安田善次郎全傳』第三卷（424－425頁）に詳しい。また、熊倉功夫『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会、1980年）217-219頁も参照した。
- (28) 前掲『富豪の時代』第5章、および、三井八郎右衛門高棟傳編纂委員会編『三井八郎右衛門高棟傳』（東京大学出版会、1988年）614-618頁、参照。
- (29) 三井と天皇や家元の関係については、廣田吉崇「近代における茶の湯家元と天皇との距離：天皇・皇族への献茶にみる家元の社会的地位の向上」『日本研究』44（国際日本文化研究センター、2011年）が、とても参考になった。『京都博覧会沿革誌』中巻、京都博覧協会編纂（明治36年）も参照。
- (30) P. ブルデュー（石井洋二郎訳）『ディスタンクシオン I』（藤原書店、1990年）104頁。

- (31) 齋藤康彦「茶の湯の復興と近代数寄者の台頭」『山梨大学教育人間科学部紀要』第10巻（2008年）。
- (32) 『東京朝日新聞』明治39年10月23日付。
- (33) 田村西男「階級無差別」『鶴翁余影』（鶴友会編、鶴友会）282頁。
- (34) 黒岩比佐子「古書の森日記 by Hisako：古本中毒症患者の身辺雑記」（http://blog.livedoor.jp/hisako9618/archives/cat_322719.html）
- (35) 佐藤尚友（青衿）『学生的前途』（実業之日本社、明治39年）210-213頁。
- (36) 雨宮敬次郎述『過去六十年事蹟』（櫻内幸雄編輯・発行、明治40年）3-4頁。
- (37) 前掲書、4-5頁。
- (38) 雨宮啓次郎著・井上泰岳著『奮闘吐血録』（実業之日本社、明治43年）1頁。
- (39) 洪沢栄一『実業訓』（成功雑誌社、明治43年）158頁。
- (40) 前掲書、109-110頁。
- (41) この点、および、「独立自営」の思想については、拙稿「戦前期日本における実業家と言論」『社会学評論』69-3（2018年）を参照されたい。

〔付記〕

本稿は、令和4年度～令和6年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「戦後日本社会における金銭観と金銭作法に関する歴史社会学的研究」（課題番号：22K01833、研究代表者：永谷健）の研究成果の一部である。